

東邦大学医療センター大森病院臨床教授

関東裕美

KANTO Hiromi

Q&A FOR SKILL UP

Q

化粧品の中でアレルギーとなる頻度の高い成分を教えてください

A 私達の生活必需品である化粧品は、装うための製品に加えて、皮膚の保湿や遮光、清浄など治療に値する製品から、皮膚に特定の作用を期待できる有効成分を含む製品までさまざまなものがある。平和で豊かな超高齢社会である昨今、私達の生活に潤いを与えてくれている化粧品ではあるが、誰もが同じ効果が得られるわけではない。海外輸入化粧品や自家製の化粧品、スキンケア製品としてパック剤やピーリング剤、二重まぶた用のり、まつげエクステなど顔の一部修正目的で使用される製品もある。各自が自分の皮膚状況を踏まえて化粧品を自身の生活に取り入れれば問題は起こらないはずであるが、高齢社会であるがゆえに最新の製品にも関心が高いようである。体質的な皮膚炎があると皮膚の健康維持は難しく、化粧品にかぶれたと感じることが多いようで、他院で化粧をやめれば治ると言われたのにやめても治らないと受診する患者がとても多い。化粧はやめても洗顔をどうしているかと聞くと、たいてい患者は洗浄剤を継続して使っているという。弱い皮膚だからこそ保湿と遮光は継続して、化粧を落とすのはメイク落としのみで、後は水かぬるま湯で洗うのみと指導するだけで患者は皮膚の健康を取り戻すことがある。

通常20歳前後で始めた化粧とその落とし方、スキンケアを同じ手法で継続していることが多いが、年齢による皮膚の変化に気がついて臨機応変に変えることができる人は健康な皮膚を維持できるようなのである。一方、海外化粧品や抗老化、美白対策と、自分の皮膚状況を省みず積極的に多くの化粧品を取り入れて日常生活を過ごしていると皮膚トラブルを起こしてしまう。化粧はメイク落としで落としてから洗浄剤を使用して洗い流す、いわゆるダブル洗顔は、皮脂分泌状況により使い分けるべきである。きちんと化粧品を落とさないと皮膚に残った化学物質が皮膚を傷めるという観念をもつ人が多いようであるが、泡で優しく洗っても何度も皮脂を擦り落とすことになり、その状況は乾燥皮膚を悪化させる。40~50歳を過ぎてても皮膚変化を無視して年間を通じ洗顔方法を変えずにいれば、皮膚トラブルが起こるのは当然のように思うが、多くの消費者は自分の洗顔方法に疑問を抱くことなく、皮膚トラブルが起こったのは化粧品のせいだと考える。

当科では積極的に化粧品パッチテストを実施しているが、検査時に患者が疑わしいと考える化粧品が何十種類にも及ぶことがある。洗浄製品は1%希釈にして貼付するので、持参製品の制限をしないと時間的にも実施不可能になってしま

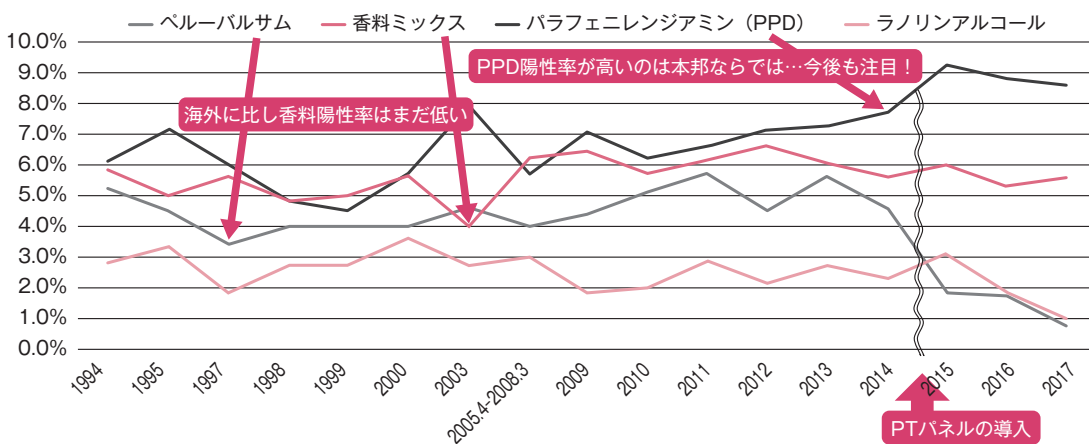


図1 化粧品スタンダードアレルギー陽性率の推移

(文献3より引用)